

第 67 話<休山>の要約と参考資料

第 67 話<休山>の要約

大正時代の後期、亜砒焼き窯から 150 メートル以内で暮らしたのが地主の佐藤喜右衛門、弟の百熊、風呂焚きの佐保ミサ、鉱山長屋の労働者とその家族。子どもたちは、亜ヒの白い粉の降った石の上に字や絵をかいて遊びました。この人たちに激しい症状が現れました。

第 67 話<休山>の参考資料

6 7 - 1 外録鉱山の休山

和合会議事録

昭和二年二月二十五日 定期総会 佐藤岩吉宅 49 名出席

一、亜砒酸製造事業ニ関スル件

亜砒酸製造ハ目下休業シフルモ亦着手スル場合に於テハ営業者ヨリ申出アル時
和合会ニ話出ナスコトヲ協定ス

宮崎県統計書

昭和元年

西臼杵 外録 銅鉱 採鉱高 410 貫 鉱石販売高 410 貫 価額 100 円

昭和 2 年

土呂久の記載なし

昭和 3 年

西臼杵 外録 砒鉱 採鉱高 93,200 貫 精鉱高 84,000 貫 鉱石販売高 84,000 貫 価額 1,260 円

昭和 4 年

西臼杵 外録 砒鉱 採鉱高 854 トン 精鉱高 684 トン 鉱石販売高 684 貫 価額 2,925 円

昭和 5 年

西臼杵 外録 砒鉱 採鉱高 655 トン 精鉱高 530 トン 鉱石販売高 530 トン 価額 2,119 円

昭和 6 年

西臼杵 外録 砒鉱 採鉱高 778 トン 精鉱高 629 トン 鉱石販売高 629 トン 価額 2,513 円

昭和 7 年

西臼杵 外録 砒鉱 採鉱高 770 トン 精鉱高 623 トン 鉱石販売高 623 トン 価額 2,490 円

昭和 8 年

西臼杵 外録 砒鉱 採鉱高 773 トン 精鉱高 624 トン 鉱石販売高 396 トン 価額 1,683 円
製出高 49,200 キロ 価額 9,057 円 製品販売高 49,200 キロ 価額 4,914 円

昭和9年

西臼杵 外録 砒鉍 採鉍高 941 トン 精鉍高 725 トン

製出高 149,763 キロ 価額 19,469 円 製品販売高 139,426 キロ 価額 15,678 円

6 7 - 2 昭和初期の砒鉍業の概況

昭和2年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 亜砒酸ノ市況ハ、依然トシテ不振ノ域ヲ脱スルコト能ハス。各鉍山微々トシテ振ハサリシモ、本邦随一ノ亜砒酸製造工場ヲ有スル栃木県足尾鉍山ニ於テ、前年来ノ内地滞貨一掃ノ目的ヲ以テ、主要需要者タル米国ニ相当安値ヲ以テ輸出シタルト。且又^{かつまた}原鉍タル「コットレル」煙灰ノ収塵成績良好ナリシトニ因リ、結局、内地鉍業高ハ285万余斤ニ上リ、前年ニ比シ約113万斤（6割5部強）ノ増産ヲナシタリ。

昭和3年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 我国亜砒酸ノ輸出国タル米国ニ於テハ、其需要ノ減少セルヲ以テ滞貨増加スル現状ニアリ。従ツテ亜砒酸市況ハ精砒ニ於テ稍高値ヲ生セルモ、粗砒ニ於テハ殆ント価格ノ高低ヲ見ス、依然トシテ不況ナルヲ免レス。唯、砒酸鉛トシテ南洋方面ニ輸出セラルルモノ逐年増加ノ傾向アリ。栃木県足尾鉍山及岐阜県神岡鉍山ニ於テハ、何レモ「コットレル」式収塵機ノ副産物ナルカ、之ヲ昨年度ノ産額ニ比スレバ、何レモ増産ヲナシ、島根県笹ヶ谷鉍山ニ於テハ原鉍ノ採掘ヲ手控ヘタルタメ、前年ニ比シ減産ヲ示シ、兵庫県生野鉍山及岩手県甲子鉍山ハ本年ニ入り、一時操業ヲ開始セルモ、後者ハ年末ニ至リ再ヒ休山セリ。

昭和4年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 甲子鉍山（岩手）ニ於テハ、本年度再ビ事業ヲ開始シ、焼鉍炉ヲ改築シタル結果、多少ノ増産アリ。足尾鉍山（栃木）ハ本年初頭、銅鉍業^{やや}稍活況ヲ呈シタル為メ、副産物タル亜砒酸ノ産出モ幾分増加シタルモ、単ニ一時的ノ現象ニ止マリ、又、常態ニ復帰スルニ至レリ。生野鉍山（兵庫）及笹ヶ谷（島根）ニ於テハ、前年ニ比シ減産セリ。

昭和5年 本邦鉍業ノ趨勢

砒鉍業 前年以來需要減退シ、市価モ逐月崩落シ、神戸市場ニ於ケル本年ノ平均市価ハ6円50銭（112^{ぽんど}封度入1箱）ニシテ、前年ニ比シ1割強ノ下落ヲ示セリ。然シテ^{しこう}笹ヶ谷鉍山（島根県）ガ昨年ニ比シ著シク増産セル外、足尾鉍山（栃木県）ハ著シク産額ヲ減シ、生野鉍山（兵庫県）ハ砒鉍製錬ヲ中止セリ。

昭和6年 本邦鋳業ノ趨勢

砒鋳業 亜砒酸ハ大部分輸出スルモノナルガ、本年ハ海外ノ需用比較的大ナリシ為、価格ハ幾分下落セル状態ナリシモ、各鋳山何レモ増産セリ。唯、笹ヶ谷鋳山（島根県）ガ銅鋳業不振ノ影響ヲ受ケ、砒鋳ノ採掘及製錬ヲ中止スルハ遺憾ナリ。

昭和7年 本邦鋳業ノ趨勢

砒鋳業 市価前年ニ比シ騰貴セルモ、本鋳業ハ主トシテ銅鉛鋳業ノ副産物ナルヲ以テ、之等主鋳業ニ支配セラルルモノ多ク、サシタル変化ナシ。

昭和8年 本邦鋳業ノ趨勢

砒鋳業 業界おや稍好転ノ兆アリ。生野鋳山（兵庫県）、笹ヶ谷鋳山（島根県）ニ於テハ製錬事業ヲ開始セリ。

昭和9年 本邦鋳業ノ趨勢

砒鋳業 亜砒酸ノ市価ハ前年ノ生産過剰ニヨリ下落セルモ、銅及鉛鋳業ノ副産物タル砒鋳業界ハ、足尾鋳山（栃木県）、生野鋳山、琢美鋳山（以上兵庫県）等ニ於テ収砒装置完備ノ結果、増産トナレリ。

昭和10年 本邦鋳業ノ趨勢

砒鋳業 特記事項ナシ。

福岡鋳山監督局管内 11年度鋳業の趨勢（「鋳業」第14巻8号）

5. 亜砒酸鋳業

前年に比し輸出激減し、市価平均1箱1円余の値下がりとなり、市況軟調なりしも、10月に入り朝鮮に於ける風水禍の為め、亜砒酸の生産阻害せられ、需給状態に変調を来し、更に亜米利加に於ける棉業界の景気好転により市況やや活発なり。

67-3 大正末期から昭和初期の佐藤喜右衛門一家

富高丈平さんの話（1980年6月14日聴取；大分県国東町深江）

*富高丈平は、喜右衛門の妻サキの妹セツノの夫。なお、サキとセツノの間には、喜右衛門の弟百熊の妻シマノがいた。

わしは大正15年11月に半年ばかりセツノを連れて土呂久へ行った。鋳山に入るつもりで行ったんじやが、鋳山は止まっちゃってな。半年おって鋳山がまだ始まらないので、昭和2年5月22日か23日に（国東に）帰ってきた。その間、ヨネさん（セツノの母）の家（畑中の十一郎さんの家の下）に住んだ。土呂久におるとき、どこに行っても焼酎攻め。

わしを珍しがってくれて、待遇がよかった。それで、くたびれた。土呂久に悪い思い出はない。三蔵さんが、とてもよく面倒をみてくれた。それに平作さんも。土呂久に行つてすぐは、こりゃ山ん中じゃな一。一人でおられるところじゃない、と思った。

喜右衛門さん方によつたから、あすこの水を飲んでたら、早や死にしちよつたやろう。窯の後ろに木はなかった。喜右衛門方、みんな咳が出よつた。声はでらんやつた。セツノがよう咳がでよつたから、亜砒が影響しとるのではないか、と思つていた。

高見保さんの話（1975年ごろ聴取）

屋敷の裏は、えびの高原あたりの樹氷ですな、真っ白ですよ。あれが害とも思つておらんだつたです。（窯から）100メートルも離れとらんですから、山を背に、喜右衛門屋敷は鼻の下に煙突があるも同じですよ。家の前に幅20センチくらいの溝があつて、その水を飲んどつたです。知らず知らずのうちに鉍毒に犯されたんですな。

67-4 川田時代の鉍山長屋

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」より

大正10年代の長屋（P22~23）

大正10年代の土呂久鉍山に、長屋は5棟あつた。長屋とはいつても、ちつとも長いこたない。短こうても質素な建てものでの。家賃は払わんでよかつたが、まこち粗末なつくりじゃ。萱葺の屋根に麻殻おがらか萱の壁、戸は麻木戸。戸板があれば上出来よ。台風や豪雨をしのぐ雨戸だけは薄い板を使うち、ちょうつがいちょうつがいで止めた開き戸になつておつた。床は、板の上に藁を編んだむしろを段々に重ねて、いちばん上に縁をとつた上敷が敷いてあるだけ。（略）長屋と亜砒焼き窯との距離は、50間もなかつたろうや。直径4、5寸の麻殻を束ねた戸や壁を吹き抜けち、朝から晩まで、煙は部屋の中へ流れこみよつた。

土呂久川西岸の長屋（P23~24）

「樋の口」より一段高い所に四軒長屋、そのすぐ上に鉍山事務所、その西側に一軒長屋にあつた。丸木の上にズリをのせた橋の小口での。こん長屋に、「樋の口」を出たあとの政市つあん夫婦が住んでおつた。（略）四軒長屋の下に、川へ落てそうな大きな岩があつたがの。この陰に七分の松板でつくつた三尺四方深さ一尺五寸の貯水槽を置いて、四番じき鋪じきの湧き水を竹の樋で引いちくる。こん水をブリキのバケツで長屋の戸口の水がめまで運び、飲み水や炊事に使うた。貯水槽にも水がめにもふたがねえ。舞い落ちる亜砒が沈殿して、底に、いまいうへドロみみたいな白い層がでけよつた。それを飲むんじゃき、身体にいいはずがない。長屋に寝ておると、鼻がもげるような臭いの煙が流れちくる。

鉦山事務所 (P26~27)

政市つあん親子の長屋より一段低い所に、造りの違う家が 2 棟あった。長屋は土を掘って柱を埋むるだけの掘立小屋じゃが、この 2 棟は土台の上に建てるぬき屋での。1 軒が鉦山事務所で、鉦山長の川田平三郎が住んでおった。もう 1 軒に、精製焼きの野村弥三郎さんの一家。(略) 鉦山事務所の広い土間にカンテラ用のカーバイド、3 畳くらいの板の間に配給用の味噌、醤油、砂糖などが並べてあった。畳の部屋は、こたつを切った 4 畳半のゴゼンと 8 畳のオモテ。(略) 弥三郎さんとカタさんには、勉と千代子という 2 人の子がおってよ。一家 4 人は政市つあん夫婦が移ってくるまで、橋の小口の一軒長屋に住んだ。それからいつとき川田と一緒に鉦山事務所で暮らしたあと、別棟のぬき家にはいった。

風呂たきミサさんが住んだ一軒長屋 (P27)

精製場の 10 間くらい手前に、鉦山の共同風呂があった。畳 2 枚敷くらいの木造りの風呂での、5, 6 人はゆうゆうはいれる広さじゃ。洗い場は、並べた石の上に板を置いただけ。脱衣場にはちよとした棚があつて、屋根は板で葺いてあつた。^{あひやま} 鉦山は風呂がなきゃ、どうもならん。^{あひやま} 焼き夫は^{あひやま} 鉦山の粉が付くと、すぐ風呂に飛び込んで、白粉を塗り直して仕事についた。じゃき一日中、風呂をわかしちよる。

共同風呂と道をはさんだ向かいに、8 畳くらいの狭い一軒長屋があった。ここに 14, 5 歳を^{かしら}頭に 6 人の子持ちの^{おなご}女が住んじよつた。風呂たきのミサさんじゃ。

67-5 長屋の女性労働者の症状

池田牧然「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉦山ヲ見テ」より

鉦山ニ出稼スル家ヲ訪フテ見ルト、妙齡ノ婦女ノ声ハ塩枯声デ、顔色如何ニモ蒼白デア
ル。久敷出稼デ居ル人ノ顔面ハ、恰モ天刑病 (* 1) 患者ノ様ニ浮腫糜爛、眼モ異様ニ充
血シテ居ル。果シテ人ノ嫌フ天刑病カ。予ハ決シテ其レト信ズルモノニ非ズ。

注 1 ハンセン病のこと。現在では、ハンセン病は感染力のきわめて弱い病気であり、アメリカで開発された薬で完治することが明らかになっています。この報告記が書かれた当時、不治の病のように思われて「天刑病」という言葉が使われていました。これは、誤った認識のもとで使われた言葉であり、廃棄すべき用語ですが、この報告記の史料としての価値を考えて、原文のままにしています。